

はじめに

20世紀は、科学技術の発達を背景にした経済活動に支えられて社会の繁栄が築かれてきたが、一方で環境汚染や資源の枯渇など深刻な問題も引き起こされてきた。環境の汚染は、先進国がこれまでに排出した環境負荷と近年の途上国の経済発展や人口増加による環境負荷の増大が相俟って、その影響が生態系や大気圏を含む地球規模にまで達するようになった。この問題に対して、私たちはさらなる科学技術によって解決しようと試みてきた。しかし、環境問題は、科学技術だけでなく、政治、経済、資源・エネルギー、人口、教育、貧困など複雑に絡み合った多くの因子を含んでおり、環境問題を科学的側面、あるいは各因子の個別的な側面から解決しようとするには限界が見えてきた。

環境の世紀といわれる21世紀になって、わが国は持続可能な社会を構築するために低炭素社会、循環型社会および自然共生社会を目指した統合的な取組みを展開することとした。この統合的取組みの背景にある地球温暖化、資源枯渇および生態系破壊という危機に加えて、2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波による福島第一原子力発電所の事故は、放射性物質汚染にかかわるエネルギー問題という第4の危機を露呈することになった。低炭素社会の切り札といわれた原子力発電の安全性が大きく揺らぎ、安全な社会の構築が改めて重要な課題として浮かび上がってきた。

環境問題は多面的な視点から捉えることが重要であるが、その本質には「環境と人間の関係」があり、まずこの関係を整理しておく必要がある。筆者らは、環境と私たちの生活や社会との関係を正しく知ったうえで、その知識に基づいて適切に行動することが「環境学を学ぶ」ということであると認識し、本書『基礎から学べる環境学』を執筆するに至った。環境問題が複雑化するにつれて、環境学的重要性はますます高まっており、本書はその気運の中での環境学への小さなチャレンジである。

ii はじめに

本書は全7章（第1章～第4章は田中，第5章～第7章は西浦担当）で構成されている。第1章では「環境学と社会」として，環境とは何かを知り，私たちの生活や社会と環境とのかかわりを整理したうえで，持続可能な社会を目指した環境学について基本的な考えを明確にした。第2章では「地域環境問題」として，わが国の環境小史を整理し，環境問題の背景や影響を知ったうえで，具体的な地域環境問題の発生の仕組みについて説明した。第3章では「地球環境問題」として，地球温暖化やオゾン層の破壊などの発生の仕組みと対策・取り組みを，次に海洋汚染や熱帯林の減少などの概要を説明した。第4章では「環境法」として，わが国の環境法の体系と環境基本法について整理し，次に具体的な公害，廃棄物，化学物質，自然環境保全，地球環境および環境影響評価等に係る法制度の概要を説明した。第5章では「社会経済システムと環境政策」として，人間活動が与える環境への影響を総括的に整理し，その対応策について説明した。第6章では「都市・地域の環境管理」として，都市機能の集約，公共交通の利用，環境アセスメント，生態系サービスなどの視点から都市・地域の環境管理手法を説明した。第7章では「環境教育・環境倫理」として，人間と環境とのかかわりから環境教育と環境倫理の役割について整理した。

本書は，2003年に出した『基礎環境学』をベースにしながらも，その後の環境問題を取り囲む社会の変化を踏まえて，全面的に書き直した書である。書名『基礎から学べる環境学』が表すように，本書は広い読者層を対象として，できる限り「わかりやすく，要点を絞って」を念頭において，基礎的な内容でまとめている。本書が「環境学」の入門書として大学等や市民の環境学習に広く利用され，環境教育や環境保全の一助となれば幸いである。

なお，本書で示されている図表は，本書の重版・改訂前でも，必要に応じて新データの追記や更新を行い，共立出版 Web サイトに掲載するので，適宜活用されたい。

2013年10月

田中 修三